

一歳半までは、「ウンマ」とか「マンマ」とか、僅か数十の“カタコト”しか言へなかった幼児が、それから二年位の間、立派な内容のある、文法的にもしっかりとした日本語が話せるやうになる。

日本語には、テニヲハや動詞・形容詞の活用といふ、日本語を学習する外国人にとっては大変学習しにくく使ひにくい文法上のきまりがある。日本語を何年間も学習したといふのに、「私、行けません」とか、「私、行かないよ」といふやうな、テニヲハも使へなければ、活用も正しく使ひ分け出来ない外国人が多いことは、誰もがよく知ってゐる所である。

ところが、幼児は、三歳ともなれば、テニヲハを正しく使ひ、活用も正しく使ふことが出来るやうになる。「僕、行かないよ」などと言ふやうな幼児はほとんど見ることが出来ない。

然し、それは決して教へられてさうなるわけではない。「ここでは未然形を使ひ、ここでは連用形を使ふのだよ」などと教へる親はゐるはずもない。それなのに、一歳半までは「ウンマ」「マンマ」としか言へなかった幼児が、それから二年経つか経たないといふのに、未然形を使ふべき所ではちゃんと未然形を使ひ、連用形を使ふべき所では連用形が使へるやうになるのである。実に驚くべき能力である。

私の孫は、三歳になった頃、“ピンクい”といふ言葉を使ひ始めた。これは誰が教へたものでもない。また、誰もこのやうな言葉を使つてゐる者が周囲にゐたわけでもないのに、“ピンクい”といふ言葉を使ひ出したのである。だから、自分で作り出した言葉だと言ふことが出来る。

私は、この事実から、幼児は周囲で語られる言葉を耳にして、それを単に吸収してゐるだけではないことを悟った。「赤 赤い。白 白い」といふやうな言葉が頭の中に入れば、それらの事実から、「色の名前+“い”」といふ造語の法則が頭の中に自然と作られ、また、その法則が自然と適用され、“ピンクい”といふ言葉になって口から出て来るのであらう、といふやうに考へた。

どうも幼児といふものは、言葉を使ひ始めて二年と経たぬうちに、雑然と吸収し覚えた言葉が、自然と帰納的に整理されて、そこから法則が作り出され、同時に、その法則が適用され使へるやうになるものと思はれる。もしもさうでなかったなら、動詞や形容詞の活用が誤りなく使はれるやうになるわけが無いではないか。

このやうな頭の働きは、幼児には誰でもひとりで働くものであるが、幼児期を過ぎると、途端に、急速に衰へて行くもののやうである。だから、外国語の学習でも、幼い者ほど上達が早いのである。大人の外国人が、テニヲハや活用を正しく使ひこなすことが出来ないのは、彼らが

幼児期を過ぎてすでに年久しいからだと考へられる。

幼児期には、誰でもこのやうな素晴らしい能力があつて、それが素晴らしい働きをしてゐるのであるが、然し、それは、幼児の頭の中に「赤・赤い。白・白い。……」といふやうな言葉が豊富に収められてゐて、それで初めて、「ピンク　ピンクい」といふ思考が働くのであつて、何も入つてゐない頭では、思考は決して働かない。働かせやうが無いのである。私たちはこの事をよく知つて置く必要があると思ふ。

幼児の頭の中で自然と働く帰納的思考や演繹的思考といふものは、思考の材料である言葉が豊富に頭の中に貯へられてゐて初めて自然に働く作用であつて、言葉が無くては頭は働きやうが無い。だから、幼児期の国語教育の基本は、「幼児に対する貧富な言葉の語りかけ」の一言に尽きると言へよう。

さうすれば、幼児はその言葉をひとりでに吸収し、吸収された言葉は自然と整理され、そこから法則が作られ、語法が身について、正しい日本語が自由自在に使へるやうになるのである。